

の たの いん 野田院古墳 (3世紀後半)

～驚きの盛土・積石ハイブリッド古墳～

目次

1. おすすめポイント
2. 現地の説明板
3. 現地写真
4. 「鳥の目」で
5. アクセス

資料
番号

S1

初版：2025.10.25

1. おすすめポイント

★こんな「前方後円墳」もある！！

～驚きの「盛土・積石ハイブリッド」古墳～

「前方後円にすりゃいいんだろ。後は俺らの流儀でやるぜ」とでも言わんばかりの形式
強い「心意気、自負」を感じます
しかもよくぞこんな高地（標高400m）に！

★充実の説明板と展望設備

- ・この特殊な形式の古墳を築造する過程を詳しく説明してくれています
高度な土木技術にも注目ください
- ・是非、展望台から古墳の全体像、さらに瀬戸内を見渡す大パノラマを楽しんでください
四国の山ってちょっと独特（笑）

2. 現地の説明板

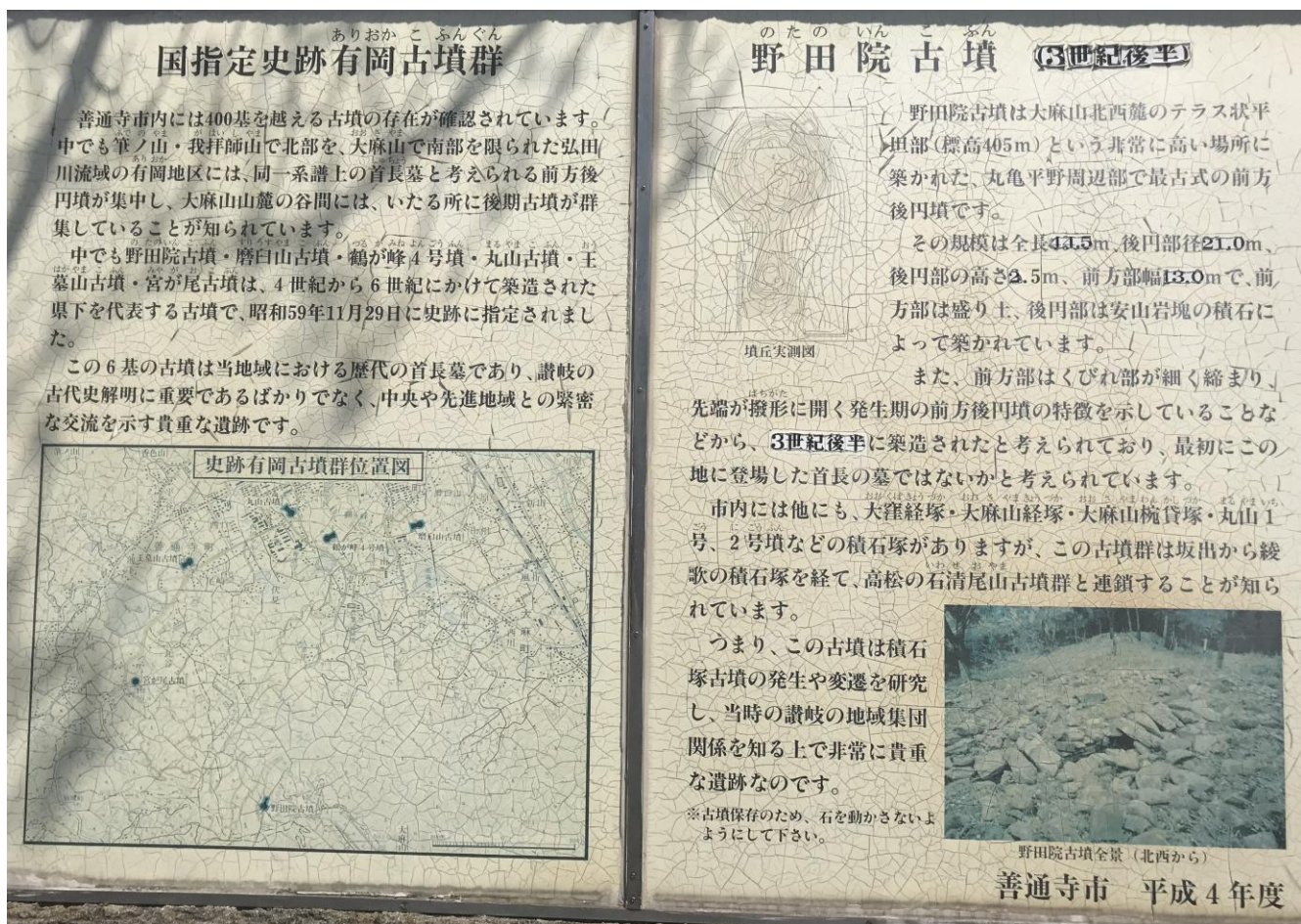


図2-1

2020.3



図2-3
吉備鳥瞰
空撮写真

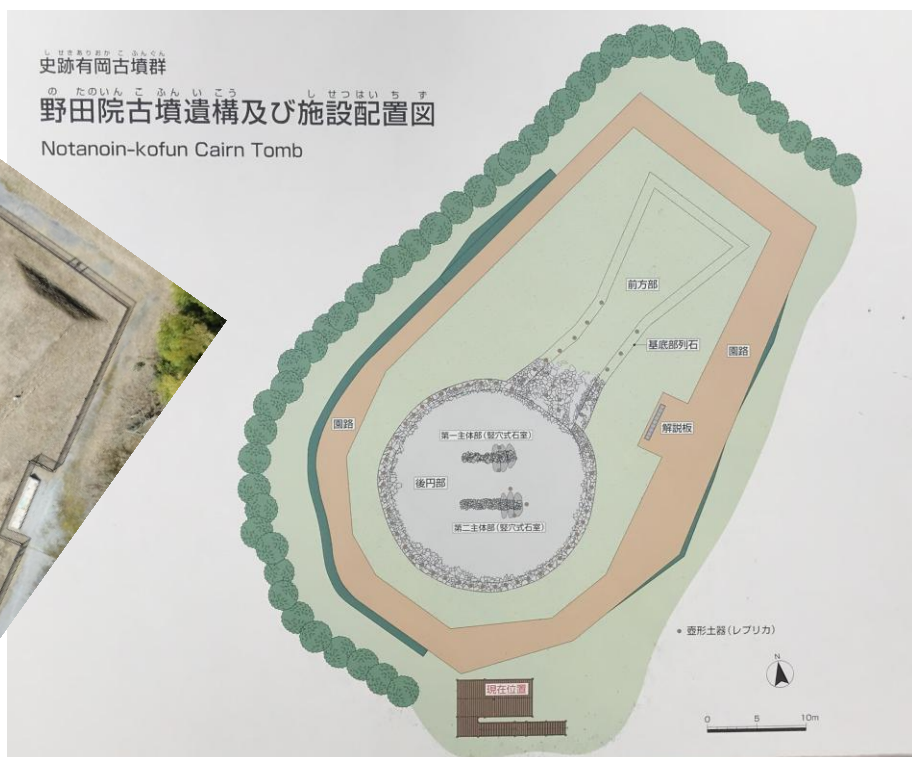


図2-2

作業工程①

最初に古墳を構築する場所を決めます。野田院古墳の場合は見晴らしのいい尾根が選ばれました。まず尾根の上を平らに整えることから始まりますが、その周囲には急な斜面が残ります。平坦部から一部傾斜部にかけて後円部の円筒を設定し、これに沿って石材を配置しています。

作業工程②

次にその内側に石材を詰めます。平坦部では小型の石材を詰めていくだけで、傾斜部では内部に詰める石材は比較的大きく扁平なものが多く、地山と逆の向きに連続して立て、整然と配置しています。これは斜面部分の石材が下方に滑り出すことを防ぐことが目的とされます。傾斜部に高く石材を積み上げる際に、崩れにくい積み方を知っていたようです。この工程で後円部の壁を水平に上げています。

作業工程③

作業工程②で造られた平坦部の上に二基の石室を造り始めます。まず石室を造る部分に細かい石を敷き詰め、この上に荒い粘土を敷き、石室最下段の石材を配置します。次に粘土床用の細かい粘土を敷いています。この粘土は石室の床面だけでなく、石室最下段の石材を包むようにその外側にも及んでいます。この粘土の中から多数のガラス小玉が出土しました。通常の副葬品ではなく祭祀遺物だったようです。

石室の四方の壁を積み上げながら後円部周囲の壁も同様に高く積み、その間に石材を詰めていきます。後円部の一段目は石室の下半分が積み上がった段階で完成します。この作業工程は解体修理の時に後円部の断面で確認できました。



後円部と前方部の接合部検出状況 (H12)

後円部と前方部の接合部に残る後円部（一段目と二段目）の検出状況です。後円部を積んだ後に盛り土の前方部が造られたため、この部分では後円部の石積みが見えずに完全な形で残っていました。後円部はこれを参考に復元しました。

作業工程④

次に後円部一段目の上に二段目を造り始めますが、この時に前方部の一部を坂道状に造っています。古墳を造る場所を決めるにあたっては、その材料となる石材の取りやすさも大きく影響したと思われますが、野田院古墳の北東にある尾根付近には石材の露頭地があり、尾根伝いに運び降ろしたものと考えられます。前方部は土でできていますが、くびれ部でその断面を見ると後円部の1段目の高さで前方部側にゆっくり下る面が確認できます。墳丘（後円部）へと石材を運びやすくするための坂道が造られていたようです。この作業道を利用して重い石材を運び上げたようです。

二段目は一段目よりひとまわり小さくし、まわりに平坦な段を造っています。造り方は一段目と同じで、石室の四方の壁が完全に積み上がった高さで後円部の二段目が完成しています。

作業工程⑤

ここで石室に巨大な石を蓋をします。この蓋石を覆い隠すため、この上には更に多くの石が積み重ねられていたようですが、後円部の三段目は完全に崩れていたのでその形は不明です。

最後に作業道としての使用が終わった前方部を完成させ、その表面に石を置き古墳が完成します。後円部の北西側は不安定な斜面にはみ出ています。後円部を作る場所をここから少し南東に移せば、全体を平坦な場所に作ることはできたはずです。傾斜部に造られた後円部の側面はとも高き壁になっていて、しかも平野の方に向いています。皆が生ずる場所からよく目立つように考えたようです。

2020.3

図2-4

野田院古墳保存整備事業

Conservation and Presentation of Stone Mound

昭和59年11月29日に岡岡古墳群が国の史跡指定を受けた後、最初に王墓山古墳、続いて宮が尾古墳の保存整備事業を実施し、平成9年度からは野田院古墳の発掘調査と保存整備事業に着手しました。

発掘調査は平成13年度まで実施し、平成12年度からはじまった保存整備工事は平成14年度に竣工しました。横石塚の内部構造まで調べる発掘調査や解体修理・保存整備は国内でも初めての試みでしたが、古墳の内部構造や構築の工程まで知ることができました。

野田院古墳が造られた時の集落は今の普通寺市街地の辺りで標高は約30m、野田院古墳は標高400m付近にあり、全国で最も比高差のある場所に造られた古墳としても知られています。付近には視界をさえぎる山も少なく、古墳からは丸亀平野・三豊平野・瀬戸内海はもちろんのこと、遠く吉備（岡山）・安芸（広島）・伊予（愛媛）まで展望できます。展望台からご覧ください。



後円部の築工事現場 (H13)

図2-5

の たのいん こ ふん こう えん ぶ な い ぶ こ う そ う も け い

野田院古墳後円部の内部構造模型

Cross-section Model of Stone Mound

善通寺市では昭和57年度に実施された王墓山古墳の緊急発掘調査を契機に、市内の代表的な6基の古墳が岡古墳群として国の史跡に指定されました。そして昭和61年度から平成3年度まで王墓山古墳の、平成4年度から平成8年度まで宮が尾古墳の保存整備事業を実施しました。

続けて平成9年度から平成14年度にかけて野田院古墳の保存整備事業を実施しました。野田院古墳は石を積んで造った前方後円墳です。このような古墳は積石塚と呼ばれており、香川県を中心に瀬戸内海沿岸部に多く分布していますが、内部構

造まで解明するような大規模な発掘調査や解体復元工事は国内でも初の試みでした。

もとの姿をとどめる部分をできるだけ残すため、墳丘の調査は解体修理を行う範囲に限りましたが、これまでに知られていなかった優れた土木技術や知識によって造られていることが判明しました。

一番驚いたことは斜面部分の基礎の構造です。後円部は平らに整えられた尾根の上から一部急な斜面にかけて造られています。平坦な部分の内部には小型の石材を詰めています、傾斜部では内部に詰めてある石材は比較的大きく扁平なものが



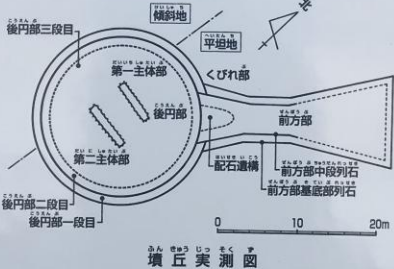
傾斜部での後円部内部検出状況（平成13年度）

比較的大きく扁平な石材を地山の横斜と逆の向きに連続して立て、整然と配置しています。



後円部発掘調査時の航空写真（平成12年度）

後円部の輪郭がはっきり見えます。中央には2基の竪穴式石室が見えます。前方部には石が置かれていますが、内部が土なので全体が草で覆われています。



墳丘の規模				石室の規模			
全長	44.5m	前方部の長さ	23.5m	第1主体部	第2主体部		
後円部の直径	21.0m	前方部の幅	6.0m~0.8m	全長	5.15m	全長	5.70m
後円部の高さ	約2.0m	前方部の高さ	約1.6m	幅	0.7~0.9m	幅	0.85~1.0m
				高さ	約1.0m	高さ	約1.0m

多く、地山と逆の向きに連続して立て、整然と配置しています。これは斜面部分の石材が下方に滑り出すことを防ぐことが目的と思われます。傾斜部に石材を高く積み上げた時に、崩れにくい積み方を知っていたようです。このような工法で後円部の基礎が丈夫に造られています。左の石貼りはその断面模型です。

調査では構築の工程まで知ることができ、そこで得られた資料によって野田院古墳を構築された当時の姿に蘇らせることができました。



図2-6

2段目テラス（石室の四壁が完全に積み上がった段階の高さ）

墳丘と石室は並行して造られていることがわかります

尾根の傾斜部に造られた後円部の断面を1/2の大きさで表現しました

地山の傾斜と逆の向きに連続して立て整然と配置された石材

1段目テラス（石室の下半分が積みあがった段階の高さ）

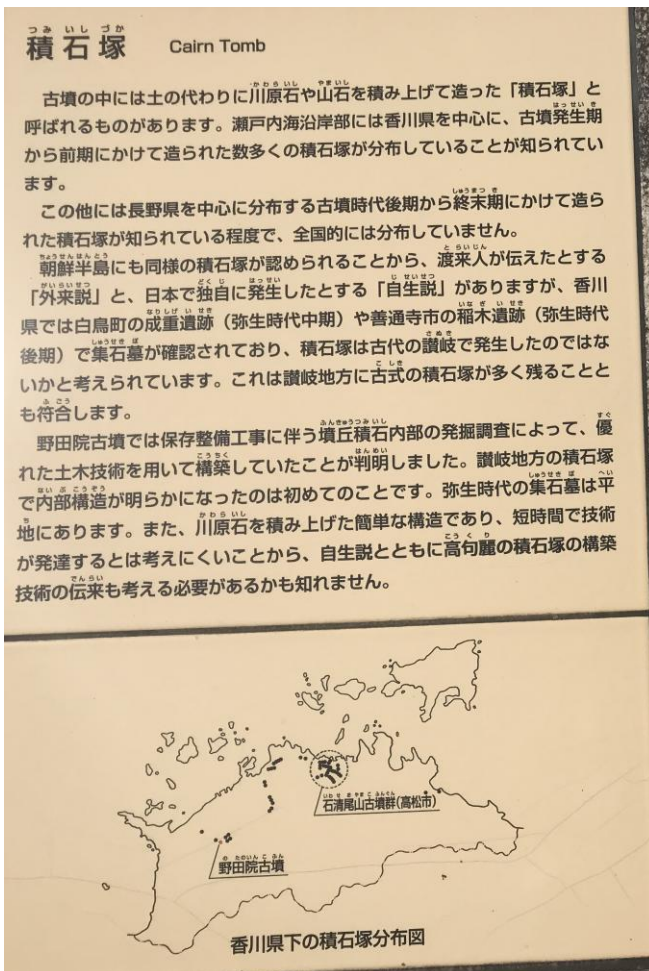
図2-7

築造時の様子（想像図）現地説明板

2020.3



図2-8



積石塚の現地説明板

図2-9



図3-1

展望台から全形を眺める



図3-2

前方部から後方を見る



図3-3

後円部から前方を見る

4. 「鳥の目」で



図4-1 前方部の「くびれ」や撥形など初期の前方後円墳の特徴が明瞭です

2020.3



図4-2



図4-3



図4-4

北西方向を望む

2020.3



図4-5

古墳の軸線は飯野山を向いているようです。

※飯野山・・・讃岐富士と呼ばれ古代から信仰の対象にもなっています

2020.3

5. アクセス



図5-1

▶ JR 善通寺駅から車で三十分ほどです

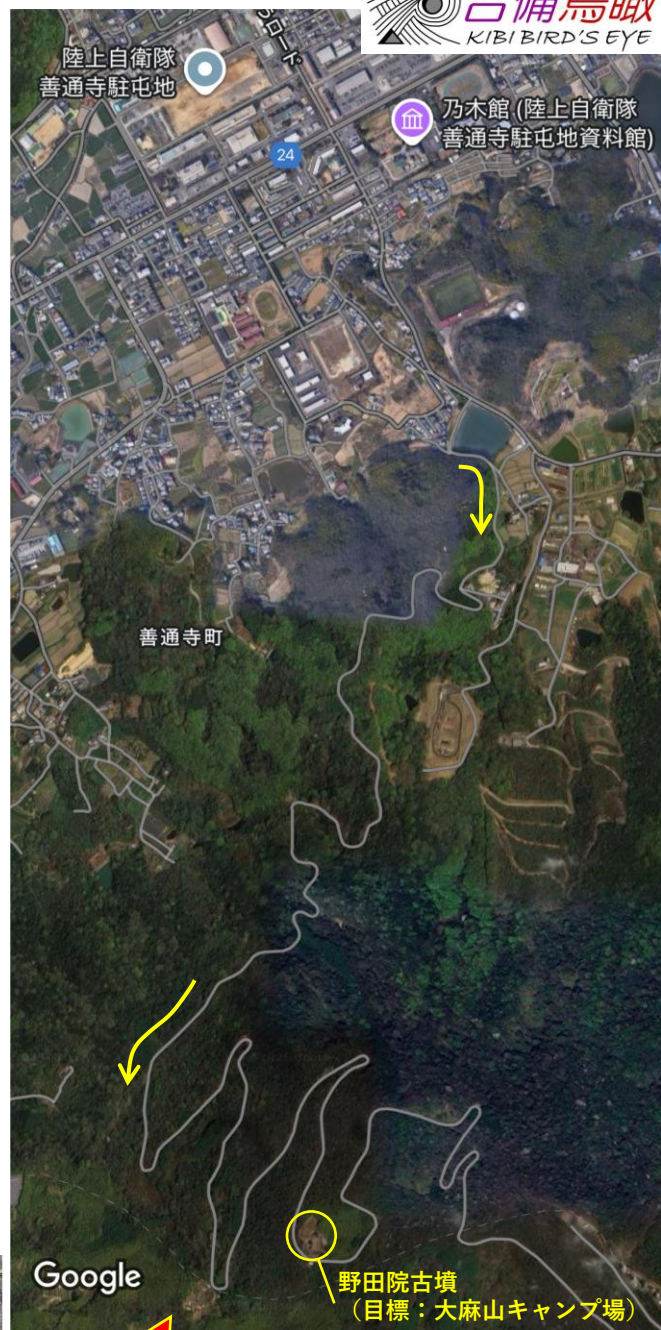


図5-3



図5-2

Google Map より